

ては怨めし相な、悲し相な涙面で眺め入て居た。天神の境内に這入ると人の餘り通らぬ、來そうもない様な木蔭を選で、其所に腰を下して、佛蘭西から來た美夫の手紙を出して又も讀み涙に潤ふた眼を手紙から寫真に、寫真から手紙にと移して居たが、懸て寫真に寫た美夫の面容を熟々と望め入て、何故あなたは物言ふては呉れませんか。あなたは何故死でくたしたのです。妻は如何したら良いのでせう。妻は如何しませう。」と聲を揚げて怨み言を述べ優しく寫た美夫の寫真の面に、和かな頬を押當てしては、潜々と泣き伏して居た。

「高子さん、如何しましたか。」

と突然に後から嘲笑ふ如に呼び掛けたのは、管野であつた。高子は誰も此邊りに面を知てる人は無い筈だと思ふて居たのに、此突然なる呼聲には晴天の霹靂の如に膽を冷して驚きに驚いた。而して衝

動的に手紙と寫真を懷中に押匿しながら後の人に振向いて見た。

「あなたは管野さん、如何して此處所へいらしたの。」

「如何してつて、あなたに隨いて來たのですよ。随分今度は失望されたでせうな。」

此那詮策に掛けては敏捷な管野は、既に今朝の新聞で、美夫戦死の報を見て、早晩此那機會もあらうと、窺ふて居た所に、豫期の機會が愈々到來して、自分の本願の果たされる時は今回り來た、とばかり北叟笑を湛へ雀躍の思で、會社の方には足も向けず、高子の通學の途中を擁して居たのである。而して高子の氣付かぬ様に物蔭から物蔭へと尾行して、竹子の家から此所まで見えつ匿れつ従いて來たのである。高子はニヤ／＼して居る管野を見ると、腹立たしくて堪へられぬので、少し怒氣を含んで、

「何が失望ですか。其麼事を言はずに早く彼方へ行してください。」
 「不知を切ても解てるぢやないですか。美夫君も氣の毒な事をしましたね。」

「其麼事は知りませんよ。」

「其ぢや、まあ其は其で好いとして、如何ですか之から僕を愛して呉れませんか。僕と結婚の約束がして貰いたいのですがね、僕もあなたの爲には今まで随分人知れず辛苦をして來ましたよ。」

「エーッ、あなたは苟もクリスチャンだと誇てる方ではありませんか失禮な事を仰言るものぢやありませんよ。」

高子の悲哀と失望に力なく悶へてた胸は、更に毒々しい管野の語に暗い獄に追込められて、大きな鞭で打たれる如に壓迫と恐怖を感じたので反撥的に無意識に斯強く叫んだのである。

「別に失禮な事は言ては居りませんよ。僕は當然の事を言て居る積なんです。まあ其麼事は兎に角としてね、高子さん、好いでせう。」
 「あなたは氣でも如何かなつたのでは無いのですか。いくらでも御勝手に仰言いよ。」

「其ぢや如何しても、あなたは僕を愛する事は出来ない、嫌いだと言ふんですね。僕も男です、最早頼みません。其代りに今までのあなたの不行績な行爲を皆なお父様に發くから、そう思ふて居てください。僕はちやんと證據物件を握て居るんだから。」

と言捨て、管野はすたくと去て行た。彼は高子が須磨の浦から歸た當時美夫と通信して居た時の美夫の手紙を手に入れて居るのである。恐らくは狡猾なる彼は高子の弟か妹を刺喉して密に手にしたものだらう。

「管野さんまあ待ってください。」
と聲を勵まし後を追跡しながら高子が叫ぶのも聞き捨てに、

「もうあなたは僕に用は無い筈です。」
と管野は後をも見返らずトツトツと行き去て了た。

高子は第二の絶望的悲劇を生じたと思ふて居た矢先に、又新らしい一の恐怖を生じたので、最早悲劇に疲れ果てた高子の精神は錯亂昏迷して氣も魂も消へ入らざりであるが、彼女の大なる悲哀の感情を相擁し相慰めて呉る爲に、開かれた大きな懐もなく、何所に取付く島とても無く、只彼女の頼とするは麻布の伯父だけであるが、其伯父すらも、日頃濃かな愛情を以て可愛がるだけに、此麼不始末を話した事を知られては、反て其お怒は烈しいだらうと思ふと、如何しても已を得ないので、只スゴ〜と萎氣ながらも我家に歸るより外に詮

術は無かつた。高子の悲める眼には、無心に音も無くハラと落ちた一枚の銀杏の葉までが、無常を悲む囁の如に聞へて、更に哀感を増した。而して浪立ち騒ぐ胸を押静めんと、一時間餘りは市中をぼんやりと歩き廻て時を費して歸て來た。

高子の父は自己の行爲に關する時は寛大で比較的平氣ではあるが、我子などに對しては頗る嚴格峻烈な方である。高子が歸て來た時は、既に管野は巧に中傷間言をしてあつたと見えて、父の心は瞋恚の焔に炎へて居た。而して高子が家に這入る哉否や、

「高子此方へ來い。」

言葉も荒々しかつた。高子は豫期して居た事ではあるが、女性而も敏感繊細な情を有た女であるから、身體は早ブル〜と戦慄しながら怖々と父の前に頭を垂れて畏り座た。

「高子、貴様は眞逆と思ふて居たのに、乃公の面を世間に出すことも出来ない様な事をして呉れたな。」

「別に其麼事は……。」

「其麼事も彼麼事もない。乃公にはちやんと證據があつて言ふのだ。又證人もあるのだから決して間違はない。宗教家の娘で而も未だ學校に通學しながら、不行績な放縱な事をして居た事を世間の人が知たら、何の面目があつて、人前に面出しが出来ると思ふか。人の精神を指導する宗教家、其に最も近い自分の家庭から不義の人間を出し、其を感化する事も教導して行く事も出来ない。他人に言はれて、如何して神様の道を宣傳して行く事が出来るか。眞に貴様は何日の間に其麼下劣な馬鹿な詰らない人間になつて呉れたのだ。乃公は學校の成績が好いと云ふから、もう少し理解

のある女だと思つて居た。お前の様な者を何日までも學校へ遣て置く必要はない。明日から學校へは行かずとも好い。家で家事の手傳でもして居るが好い。麻布の伯父さんにもそう話して置くから。」

高子は伯父にまで話されてはと、只泣の眼を摺りながら、頭垂れ脅へつゝ震へて居るばかりであつた。而して漸く面を擡げて、

「お父様！」

と僅かに言ひ出したが、心は混亂して舌は鉛の如に重く震動しなかつた。父は少し調子を緩めて誠める如に、

「其にお前も年頃だし、中等以上の教育も受けて居るのだから、暫く家事の實習でもして嫁入をするが好い。然すれば人の誤解も解けるだらう！、お前が純潔と思ふて居るのなら、其純潔も證明する

事が出来るだらう。管野君もお前を彼れ程までに思ふて居て、心配をして呉れるのだし、管野君も幸、獨身だから管野君と結婚をしたら如何だ。乃公から折入て話をすれば、先生も承諾をして呉れるだらうと思ふ。伯父さんにも一應相談はして見るがな！」

管野と聞いた高子は薄暗い、日没頃に脆弱い蛙が執念深い蛇に覗まれた如に、身の毛も竦て全身の縮まるのを覺えた。其でも彼女は只黙して居るより外はなかつた。

其日の夕、父は麻布の伯父の家に訪問したのであつた。而して二人の間の相談は如何に取極められたものか、歸宅すると、高子に「明日から當分麻布の伯父さんの家に行てお出で。」餘り怒氣も舍で居ないらしい様子で靜かに告げた。高子は不思議に思ひながらも「はい」と答へた。而して彼女は心中では「伯父は如何思て居られるかは知ら

ないが、結局優しい母の死で居ない自分の家に居て、繼母道子と氣の置ける暗い日を譬へ一日でも送るよりは、伯父の家にでも行てる方が未だ遙に好い。」と思ふて薄ない慰めに心を和けて居た。伯父は高子が管野と云ふ男を嫌てる事は好く知て居た。又美夫の事も薄薄耳に這入て居たが、眞疑を知るまでには無かつた。只噂に止るものとして、別に意にも介しては居なかつた。其で翌朝高子が行くと、「お、高子か、宜う來た。昨夜お父さんが來て種々話して行かれたが、まあ暫時乃公の家に靜かにして居れ。そうすれば人の誤解などは直に解けるからな。」

と伯父が優しい言葉で迎へて呉れるので、高子は自分の眞意を知て居る人は伯父さんばかりだと嬉しくて、只嬉し涙が頬を傳はるばかりであつた。で彼女も謹慎的な態度で、

「其では當分御厄介になります。」

「あゝ、別に厄介でも何でもありませんよ。此方は反て賑かになつて都合が好いのですから。」

「でも濟みませんわね。」

「先其麼事は好いとして、お前美夫とか云ふ男と何か關係があつたと云ふが、眞實なのかな。」

と問はれた時は、高子の胸は動悸とした。けれども彼女は其時直に美夫との關係や現在の状態を伯父の前に明瞭に肯定し、自白し懺悔する事も出来兼ねたので、

「いえ……………」

と曖昧な返事を洩すより外は無かつた。

「其男は兎に角死んだと云ふのだから、如何でも好いが、お前は管野

と云ふ男は如何しても嫌いなのか。」

と尋ねつゝ高子の顔面筋肉の動き方を巨細に窺つた。高子は何の答もせず俯いて居た。而して伯父は自分の推察通だと心の中で讀んで了た。

「結婚は一生の大問題だ。心から嫌だと思ふ男と結婚をしなくてはならぬと云ふ事もない。だが相談だがね、お前乃公の家に来て一生乃公や叔母さんの面倒を見ては呉れまいか。而して氣に入れた養子でも貰ふて、乃公の家を繼いで貰ひたいと思ふのぢやがな、如何かな。」

高子は自分の豫期を裏切られて頼む木蔭から雨が洩り出した如な氣がし出したので、返事をするのを躊躇して居た。伯父は、

「黙て居ては判らんね。」

「……………」
高子は沈黙を續けた。伯父は語を次いで、

「乃公の家に来て呉れよば、乃公の先輩の息子に、法學士で、今年慥か二十八になる中々品行の方正な、頭腦の明敏な、相當立派な風采の男を、お前の婿に貰ふて遣りたいと思ふて居るのだがな。如何かな。」

「……………」
高子は下向いた儘沈黙を續けた。

「好いだらう、如何か。返事をしなくちや薩張判らん。」

「……………」
高子は未だ答へなかつた。

「無理にとは言はんが、然すれば、人の誤解も解けるし、乃公の方は此

上ない好都合なんだ。乃公も追々年が寄て來るので心細いからな。如何だ。」

高子は靜に疊の目を見詰めて考へた。而して自分の心持は自分より外に知る人はないのだから、人を怨むべきでは無いと悟た。「美夫さんの死は自分の生命の一部の死であつて、其が自分を絶望の淵に導いたものであつた。自分の望の源泉は既に渴れ果てたのだ。既に望の無いものが生存して居ると云ふのは無意義なことである、自分の活動を他人に待つ傀儡の如なものだ、精神なき骸骨の盲動と選ぶ所は無い。」

と思詰めた彼女は遂に決心した。深く／＼決心した。其決心は悲しむべき終局に導くべきものであつた。

「伯父さん！」

と言た切り聲も發し得ず、再び黙して顔青褪めてガタ／＼顫へて居た。伯父は彼女を勞はる如に、

「如何した、考へが決つたか。」

「伯父さん、少し考へさしてください。」

「おゝ／＼、今直に返事をするにも及ばん、考へてからで好い。」

と伯父の心中では考へると云ふのは、無論承諾をする前提でもある様に思込で心ひそかに喜んでるのであつた。

高子は日の暮るゝまでは間がな顔色青褪めて考に沈んで居た。

「死、死、死、此世の中には死に越す悲惨事は無い、而も其死が今は自分には唯一の惱みから遁るゝ道となつた。其が自分の赤心か、本心か他から何の侵害を被らぬ、心の至純な最高の隠れ場所だ、棲家だ」と思た。「自分は死の洗禮に依て、常住の惱なき、葛藤なき、恐怖な

き、瞋恚なき、嫉妬なき樂園に進化し至るのであるが、自分の爲に心血を注いで呉れた父や伯父が、自分の死を見られた時の力落し、歎き、悲しみと、弟や妹が幼少にして前には慈母を失ひ、今又此姉に去れた時の心の傷み、失望の姿を想像しては、自分が彼等と同じ姿で、彼等の悲歎、失望と更に生存を續けて行く爲の葛藤や苦惱を續けて行く姿を同情、同感して行く事が出来ない」と云ふ事が、客觀の死其ものよりも悲しく思はれた。「嗚呼死。今の自分の主觀には何の驚異も變化もない死。其は客觀的には無上の悲しい事實なる死。遂に人生は死と生の迷路か。但しは主觀其ものゝ迷か。」高子は再び決心も緩めな如に考へ、又考想を續けた。「人類は早晚等しく死の洗禮を受くべきものである。其の死期を二十年、三十年延長して人世に蠢動を續けた所で、其れが何であるか。自分は人世の希望と幸福とからさへ

も呪はれた者である。』などと考へ續けたが、高子には死を翻すだけの力強いものは遂に發見する事は出来ずして反て決心を固くした。結局は死である。自己の自由なる意志に依て、自由なる時に、自由に死に得るのは人間の尊い権利である。自分を清く純に生かし得るものは死の外に何物も無いと堅くも最後の決心をした。而して彼女は自分に當てられた、小さな一室に閉ぢ籠て静に机に向ひ、熱い涙を押拭ひ全身を痙攣的に戰慄させつゝ筆を執た。

遺書

伯父上様へ、

伯父上様には一方ならぬ御心配を相掛未だ其深恩の一端すら報ずる事もなく妾は此世を永遠に去り行くものに候。

伯父上様には打開けて告白は致し兼ねまゐらせ候へども、妾の身

も魂も妾のものにして妾のものにあらず美夫様とは深い誓約を致し居たるものにて苟且にも劣しき關係など交せし事は無之候へども今は其人の生死さへも不明にて生涯妾の潔白を證明すべき時期は到来致間敷、又強て證明せんとすれば他に結婚をしなければならず、其では美夫様に對して申譯無き已而ならず、妾の生涯は恥かしき秘密を解かずして暮さなければならぬ事となり、妾には其が堪へ難き苦痛に候。

恐ろしい死。怖い死。暗らい死。妾は幾度となく考へては考へ、又思を翻しても見たなれど、既に望を失ひたる妾には今は死に至る只一筋の暗い道より外は見當り申さず候。而して曾て恐ろしかりし死は今寧ろ樂園に行く隧道に入る瞬間の如に、前面には無限に展開せる大なる自由な明るい美しい國に行く如な輝を望

み得て寧ろ嬉しく感じられ申候。
 妾の死の報ぜられたる時は定めて御悲歎御怒も多からんと存上
 まゐらせ候へども、之も夏の夜の淡い夢なりし事と御諦め被下度
 候。

何卒老年寄せられた伯父上様にも叔母上にも随分御機嫌好く
 末永く御暮しなさるべく祈上候。又妾の無き後は父上や未だ幼
 少なる弟と妹の事も何卒宜敷御願申上まゐらせ候。妾の靈は葉
 末の露庭の松の梢を渡る微風にも宿りて伯父上叔母上様の御冥
 福を祈居候間、白玉の露梢の松籟を妾と思召し、せめて朝夕に御心
 を御慰めくだされ度候。

思あまりて筆動かず、涙のまゝに

高子

と認め、更に父に宛て、

遺書

父上様

父上様には長の間、御心血を注いでの御教養、其恩は實に言ふべき
 語なき程深大なるものですが、其一端すら報ずる事をも得せずし
 て此世を去り行く此身を自分乍ら憫み、又父上には誠に御詫のし
 やうも無之事なれども、之も御苦しき一場の夏の夜の淡夢なりし
 事と諦め御許しく下さいませ。

父上様には之まで明瞭に申上兼まゐらせられたれども、實は美夫様と
 妾は固く未來を誓約致し居たるものにて、未だ苟も卑しき契など
 結びし事はなけれども、假令如何なる事が起るとも他の男子とは
 結婚など致すまじくと天地神明に誓ひ居りし事を死に行く今は

に懺悔告白致しまゐらせ候。

妾は若し美夫様が死去せられたならば、切めて獨身にても淋しく世の中に生存致したくと思はしたれども、何となく望の全部を失ひて、光も熱もない世の中に醜い骸骨があたり蠢いてる如な生活の様に思はれ、且つ自身此世に在りて、身の潔白を立てんとすれば心にも無き人と強て結婚等して、可惜虚偽の生涯を送らねばならず、身の潔白證明出来ざれば不義放縦の娘としてお父様を初め伯父上様にまでも、世の中の面目を失はしめ、名を汚さねばならぬ事となり、假令ばお父様や伯父上が御許しくくださるにしても、妾の心中には常に暗い影を宿して到底解け難い苦悶を續けて一生を光なく暮さねばならぬ事と考へては、今までは最も恐ろしいと考へた死、暗いと思はれた死は、忽ち光明の樂園の如くに見えて妾の行

くべき只一筋の道として横たはり居る已而に候。

若し美夫が生存して居られて、尋ねて来られた時は、其事を御話しくだされませ、呉々も御頼申まゐらせ候。追々と年老いさせられる御父上にも随分御無事に御暮し遊しませ。妾は單なる靈に歸するとも、父上初め家内の幸を祈て居ります。妾の死去したる事を正ちやんと、操が聞いた時は定めて泣き悲しむ事と察し上まゐらせますが、何卒お父様より好く言ひ聞かせて御慰めく

下さいませ。
書置くべき事も數々あれども、思餘りて胸迫り筆動かす候まゝ、悲しき筆を止めまいらせ候。

高子

と認めて伯父に宛てたものは机の抽出に入れて置いた。手紙の所

所には涙の落ちた斑紋があつて、字が涙に滲んだ所もあつた。伯父には自分の家に一度歸て書物などを取て來るのだと告げて、餘所ながらの長い別をして門外に出た。庭の夕顔は聖者の眠の如に眞白に開いて、飛石の下の種々の蟲は哀れつぽく喘いて無常を啼いて居た。彼女は自分の家に歸て來ては、父親には衣物の着換を取りに來た」と告げて、波立騒ぐ胸を無理にも押静めつゝ、去年の夏、美夫と共に誓つた時に着て居た、帷子に帯までも其時のものを結め更へて、遺書を抽出の中に素知らぬ面を装ふて入れて置いて、餘所ながらの永遠の別れを告げた。正之進と操に「お姉様が留守になつたら大人しくして、お父様やお母様の言付を好く聞かなければいけませんよ。」と言聞かせて、熟々と二人の顔を見入て居た。けれども斯して居る中に悲しくなつて來て、遂に涙でも流して悟られてはと心を強て鞭鞋

て「姉さんはもう行きますからね。」と盡きも果てぬ名残を惜みつつ別れて行た。高子は家を出ると直に車を飛ばして、東京驛に駆け付けて、須磨の浦までの二等切符を買た。其は如何な運命の廻合で、其所で美夫と再び會はれるかも知れぬと云ふ微かな望の糸を繋いで居たからである。而して下の關行の急行車に蕭然として乗り込んだ。新橋や品川の驛に停車した時は、隅の方で顔を匿してゐたが、横濱を通過すると漸くホット息をついた。而して汽車の中で靜かに眼を閉ぢると、東京の我家の家族や、伯父やらが大騒ぎをやつてる有様が活動寫眞のフィルムのにまざつと現はれて來た。又眼を開けば須磨浦の樂しかりし去年の光景、悲しかりし光景や美夫の佛蘭西での戦死の有様が其から其へと廻り、行燈の如に幾多の幻影が移て行くので、長い汽車中では一睡だもせず、只驚怖に襲はれてる妙

な思で、須磨に到着したのは翌朝の夕刻であつた。下車すると直に車を呼んで、山下館と云ふ去年美夫の泊て居た旅宿に行たが、其所には美夫の居やう筈は無かつた。而して女中に前に美夫の居た室を説明して、其室に一人の若い男の避暑客が居たのを、態々頼んで室換をして貰はせて、其夜は直に疲れ切た身體を横へて、切めては今宵一夜なりと、其同じ室に去年と同じ樂しかりし夕を夢みつゝ、靜かに眠らうとしたが、感情の動搖に其平和な夢は綻びて、管悲しい苦しさのみが、彼女の柔かな胸を襲ふて冷たい汗をかいて居た。鳥の聲に夜の黒い帷は破られて、高子は朝餉を終ると、旅の疲勞と恐ろしかつた、悲しかつた昨夜の夢に顔色青褪めてヒステリックな顔をしながら、只萎々と妙見山にと出て行た。息も喘ぎ乍ら思ひ出多い妙見山の奥の院の前に登て行て見た。邊りの景色には去年の夏と變た所も

無かつた。歌の主は去年のと同じかあらぬか、畫眉鳥の歌は同じであつた。太陽も海も松風も總てが同じ姿であつた。其が今日の高子には總て暗い影、悲しい聲としか聞く事が出来なかつた。而して山の頂では心ゆくばかりヨ、と泣いて、泣き抜いて、後に松の枝を折て來て祠の横板に、畫眉鳥の歌と合せし松風よ、などか今日のみ悲しくぞ鳴くと自己の感情の迸た儘のものを、見えないほど微かに書付けて、後をも振返らずにスタ、と下りて來た。午後からは此世の見納めに、思出深い須磨寺や敦盛塚、狐山、松風村雨の堂、那須野與市の墓や、さては母の悲しき思出の境濱海水浴場と見て廻て來て、旅宿の人々には何の變た氣色も見せず、床の中に這入りはしたが、高子の目も心も靜かに眠るには、餘りに動搖し、餘りに興奮して居た。東京の方では高子が、其翌日伯父の家にも歸らず、父の家にも居ない

と云ふので大騒となつて、父は警察に搜索願を出した。而して家中を隈なく搜索して見ると、伯父の家からも、高山の家からも、遺書が出たので、愈々自殺と決定して益々騒動と混乱は烈しくなつた。所々に電信を飛ばし、八方に手を別けて搜索に出懸けた。一隊は東京市内や郊外を搜索する。他の一隊は日光の華嚴の瀧など有力なる候補地として、伯父が一團を率ひて行た。父は種々思合せて見ると、何だか須磨の浦へ行た様な直感を得たので、管野が恰ど其の時に一週間の暑中休暇を得て居たのを幸に、彼を伴ふて其夜の十一時の汽車に乗込み、須磨の浦に出發した。須磨に到着すると、直に市原の邸に訪問して事件の顛末を物語て搜索の加勢を乞た。而して種々話合て見るに、未だ自殺を遂げたと云ふ形跡がないので、一同は大に力を得て宵暗に手に手に提灯を燈して、所々を捜す事になつたが、何の手

懸も無かつた。夜は追々深い静寂に更けて行て岸打つ浪の音のみ物凄く響いて居た。最早午前の一時過となつて、境濱海岸から三人の搜索する人達は不安定の思を抱きつゝ、互に濕かに話しながら、ゾロ／＼と歸つて來つゝあつた。山の手側の松の大木の生茂た御料林は、冥府の如な眞黒の恐ろしい影を作て、其下には月見草が淡く星の光にチラ／＼と透見えて、時々蟋蟀が寂しく鳴いて居て、眞黒暗の中にカサコソと大蛇がのたくる如な物凄い音も聞へて居た。高子は、既に一時過ぎて、旅宿の人々が寢静だ頃便所にでも行く様な様子で、旅宿を竊に抜出して、去年の夏に着た儘の服装をキチンとして海岸指して死出の旅にと急いだ。タツタ一筋生の彼方を望む彼女の中には最早深夜の恐怖も無ければ、暗黒の暗さも無かつた。海岸に來た時は二十日餘りの片分れ月が、静寂な暗を破て出んとする

所だつた。汀傳いに例の一の谷尻たにじりの小高い絶壁ぜつぺきに上た。邊りの松の木は曾て來た時と異かはりはなかつたが、絶壁は浪にや噛かれたか、地類ちなだれして居る所が悲しく眼に觸ふれた。高子には其が自分の生命せいめいの破滅を暗示する如に傷いたまし、感かじ入た。而して寄せては反かへす浪の音さへも、自分を呪の咀うふ死の魔の聲の如に淋さびしく恐ろしく聽きへた。去年の夏の夕美夫と共に此所こゝに來た時に、美夫が故郷こきやうの如な氣持がすると言ふた其石崖そういしがけも變りなく、青白く月に照てらされて居た。其方に彼女は向直むきなほつて、故郷こゝと思て見た。而して高子は其故郷と言はれた美夫の語が豫言よげんでもあつたかの様に、今更いまさら深く感じた。「故郷々々其は永劫えいけつの故郷であつたのだ。最早もはや離るゝ事の出來できない故郷とにをるのである」と思へば、悲しくもあり、又懐なつかかしくもあつた。「美夫さん、今浪の音と一所いこに悲しい聲を出して呼んで居るのはあなたでせう。

薄暗うすぐらい月の光に照らされて、憐あはれな姿をして其所こゝに立たて居らつしやるのもあなたでせう。妾めかけは今あなたいまの側に行きます、直すぐに行きます。而して永劫えいけつにあなたと一所いこに生いて行きます。」と肌身はな離はなさぬ美夫の寫真しゃしんを淡あはい月の光に照らして眼を大きく据へて見入り、幻想イリュージョンを見る者の如に、高子は聲を顫ふるはしつゝ、斯叫さけんだ。而して斯叫さけんで後、一丁程彼方の海岸を見ると、長い影を投げて、尺八を提さげたらしい男の姿が搖ゆぎ行く陰が見えた。「若しや美夫さんではあるまいか。」と惹ひき付けらるゝものゝ如に、無我夢中むがむちゆうに其影を追ふた。影は海岸に建て居る、或家あるいへの暗い影にスーツと消へて了しまつた。高子は尙も其影を追ふたが、遂に影も姿も見失みふた。「今のは矢張り自分の心の迷まよか」と高子は力無ちからなげに再び元の場所に引返ひきかへして。「噫、今が此肉體にくたいを通じて見える世界の見納みなきめだ。」彼女は又も涙を拂ひつゝ、故郷ふるさとを遠く來し身

ははかなくも、又故郷の泡と消へなん。」と辭世の句を心に唱へ、「お父様も伯父様もお許しを」と口の中に唱へつゝザブンと卷來る荒浪の中に吸ひ込まれた。水は漸く首を浸す位の深さで浮きつ沈みつ藻掻き漂ふて居た。深夜の静寂を破る、此雷ならぬ物音を漸く一の谷橋に來懸た、三人の搜索隊の者が聞付けた。而して何事ならん若しやと足を早めて、其現場に驅付けて見れば、寄せ來る浪に浮きつ沈みつ揉まれて居たのは、確に投身者らしい時を移して大事に至てはと血氣の管野は洋服を脱ぎ棄てるより、早くも水中に躍入て悶躁ける目的物に近付いて、腕に力を籠めて辛じて陸に救ひ揚げて、三人は寄て集て頬に手當をして遣た。すると漸く呼吸吹き返して、何か口籠るらしいので、三人は少し安心の胸を撫で下して、月の光に照らして好くく見ると、髪は亂れ足の關節の邊は傷々しく血汐が流れては

居たが其が擬ふ方無い彼等の搜して居た高子であつたので、父と管野は更にく深く驚いて黙て顔を見合せた。「高子だつたか。」「高子さんでしたか。」と稍程を経て交々聲を震はして呼び叫んだ。

「高子、お前は飛でもない事になつて終ふ所だつたな。乃公等がもう少し來るのが遅ければ、お前の生命は無かつたのだ。」

と父は潜々と涙を流しつゝ、高子を抱き締めた。

「其でも助かりなすつてまあ幸でした。」

と市原も深い同情に泣いた。

「高子さん、許してください。此様にまであなたを思詰る様にさしたのには、皆僕が悪つたからなのです。僕が自分の淺薄な考へから、戀の適はぬ嫉妬心から、種々の事をお父様に告たり、中傷をしたりしたからなのです。僕は今からは必と改心しますから、あなたは

家に歸て、お父様と一所に無事に暮してください。ねー高子さん。」と管野は今初めて自己の内心の淺猿しい姿を見知た如に、聲を揚げ、泪を絞て泣いて、自己の悪かつた事を懺悔した。父の高山と市原は此意外な管野の語に、呆然として不思議の目を見据た。高子は息も杜斷れ、に力無げに手を振りつゝ、漸く口を開いて、

「否へ、あなたが悪いのではありません。皆妾が悪かつたからなのです。」

と管野の語を遮て消へんばかりの小さな聲で微語いた。

「そうだ、皆お前の不心得からだ。遅かつたが、人間は自分の誤に氣が付き、悪から醒めた時は善人になつたのだ。管野さんは、お前を救ふて呉れた命の恩人だ。管野さんも未だ獨身だから、お前を妻に娶ふて貰つたら好いだらう。ネー管野さん、改めて僕から

折入てお願をするのですが、厄介な汚れた娘ではあるが、海の洗禮に生きた高子は、最早從來の穢を清めた高子ぢや。何卒か妻に娶て長く面倒を見て遣ては呉れまいか。僕からの折入ての頼だ。」と父は二人の過去を察し、管野の心中を推し測り、亦高子の將來の幸福を思遣るかの如に語を盡して語た。

「然し其では高子さんに對して、私の良心が如何も濟まんです。」と尻込めるかの如に答へた。

「濟まんも何も無いですよ。命の恩人だ、命の救主だ。君が這入て救て呉れなければ溺死して居たのだ。君さへ承諾して呉れるのならば好いのだから手をお出しなさい。高子も手をお出し。」

と父は高子に對しては專政君主の如に、絶對權者の如に強く促した。管野は父の高山に握らるゝまゝに靜かに怖々と手を差し伸べた。

高子は力なく父のする儘に任せて居た。其柔かな手は瘡癩の如にブルブルと青く震へて居た。優しい心臓の奥には大きな深い〜鼓動を波打たせて。

大正九年十月二十五日印刷
大正九年十月二十五日發行

初戀奥付
定價金貳圓七拾錢



著者 小林喜三郎

發行者 尾形儀市
東京市神田區表神保町六番地

印刷者 秋場熊大郎
東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地

印刷所 秋場印刷所
東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地

發行所

東京市神田區表神保町六番地
振替東京四三〇七八番

紅玉社書店

257
208

終